八戸市立 **市川中学校** 学校だより「じょ」

平成26年11月14(金)
校長通心 No.34 校長 馬渡教二

傷つくことだけ上手になって

傷つくことだけ上手になる者たちよ
陰口を叩き　陰口を叩かれれば　泣き叫び
そしてまた陰口を叩く　その陰口はまた新たな陰口を生む
そして自分だけが傷ついたと言う

傷つくことだけ上手になる者たちよ
モノを壊し　壊したのは　ムカつくからだと責任を転嫁する
壊したことを咎めればその咎めはまた新たな破壊を生む
そして自分だけがムカついていると言う

傷つくことだけ上手になる者たちよ
世の中が悪い　大人が悪い　見かけで人を判断するなと
テレビの中の陳腐なセリフを借り物に
髪を染め　耳に穴を空け　街中を我がもの顔で闊歩する
しかし決して自分の言葉　自分の主張はない
そしてこんなことをできるのは今だけと訳知り顔で言う

傷つくことだけ上手になる者たちよ
本当に傷ついた者はきっと他にいる
傷つくことだけ上手になる者たちよ
本当に傷ついた者は「傷ついた」と言う元気もない

傷つくことだけ上手になる者たちよ
本当に傷つくことを恐れ
傷ついたふりをして逃げ回ってはいないか

傷つくことだけ上手になる者たちよ
本当に上手にならなければならないものは
傷つくことではなく
傷ついた後　傷を自分で癒やす力を持つことではないか

絆シャフト再点検！！「君の言葉が勇気になるんだ」！ (＊^_^＊)

この間、全校で行われた「悩み調査」の結果を見せてもらった。ほとんどの欄は「特にありません」と記してあったけれど、ほんの数カ所に…「相手に何か言いたくても人間関係を崩したくないから言えなくて、相手に流れを合わせることが多く、疲れる」「注意できない自分が情けない」「相手に自分がどう思われているか心配」…という表現があった。**思春期のみんなの特長は「今の自分が周りにどう受け取られているか？どう見られているか？がとっても気になってしょうがない状況の中で試行錯誤しながら自分の価値判断をつくっていっている」**はずだ。（我々大人も同じ思春期を通過してきているからよくわかる）おまけに中学生の社会は学校と家庭を中心としたとても狭い範囲だから、もしそこで人間関係のトラブルを起こすと、自分の世界のほとんどを失ったことと等しい感覚になるはずだから、この表現はよくわかる。…人間関係のトラブルが未解決のまま、もし「イジメ」に発展していったら最悪である。

実は自分は幼稚園のときイジメられた時期がある。幼稚園の帰り道に同じ方角に帰る3人組で、一人の子に、二人が田んぼのあぜ道脇の水路をいっつも歩かされ靴が泥だらけになった。1カ月ぐらいで、もう一人の子の母親が靴の泥汚れに疑問を感じ問いただし、イジメた子の母親に注意したとたん全くなくなった。…そのときのことを思い出してみると、**イジメられる子は「弱虫」というイメージが強くて、家族はもちろん周りの子たちから「あいつはイジメられてる子だ」と思われたくないため一生懸命に隠そうとし、逆にカラ元気を見せていた**と思う。だからイジメられても笑ってごまかすことで「ふざけているんだ」と思われたかったのだと思う。（きっとそのままエスカレートしていくと幼稚園に行けなくなった…かも）よく、イジメている人や見ている人は「だって本人も笑って楽しんでいる」と言うけれど、心の中はズタズタに傷ついているのだ。**イジメている側は**、相手が苦しんでいるのを見て楽しかったり、自分の思い通りにコントロールするのが気持ちよかったりしているかもしれないけれど、生まれた赤ちゃんのときからそうだったはずはないから、**成長過程の中で人をイジメても何も抵抗を感じない価値観を身につけていった**んだと思う。そう考えれば、イジメをしている人は、何か「かわいそうな人」のようにも思えてくる。そして、イジメを見ている数多くの傍観者がいる。**傍観者は**3つぐらいに分かれそうだ。**①関わりたくない。もし、止めに入ったら次は自分がターゲットになりそう。②自分は直接手を出さないけれど、見て楽しんでいる。③心では「止めろ」と叫んでいるけれど恐くて勇気がない。**それでも、傍観している人たちは、何かしら「後ろめたさ」を感じているのではないだろうか？もし、一人の加害者によるイジメ行為を周りのみんなが見て見ぬふりをしたら…？周りで笑ったり、はやし立てたら…？被害者は、クラスの中の全員にイジメられているという錯覚に陥っていき、より深い苦痛と惨めさを味わっていく……。そして、イジメはますますエスカートしていく……。

ケータイ・スマホ・ネットが普段の生活の中で普通に使われるようになった現代は、イジメの質もまた微妙に違ってきている感じがする。前までのターゲットを決めて排除するようなやり方ではなく、仲間同士の関係を保つためにだったり、場を盛りあげるためにイジメを利用しているようにも見える。同じグループ同士でも、グループ内の関係を活性化させようと誰かをイジメたり……イジメというよりは、どちらかというと「いじる」という感覚に近いのかもしれない…。誰もがそのポジションになるのがイヤなので受け流したいのだけど、うまくそれができない要領の悪い子は、イジメのターゲットになりそれが固定化してしまう。…**ケータイやネットは、使い方次第では、そうした関係を増幅させるのにもってこいのツールになってしまう。**時間や空間がずれても、画面上には書き込みが一斉に並んでいるため、あたかもみんなで盛りあがっているという感覚を生むし、学校を離れても機能し続けているので「参加している」というシグナルが消えることがない。常に書き込みに反応し、盛りあがりに加わらなければならず、いつも仲間とつながっていないといけない。…「嫌なら抜ければいい」と大人は思うんだけれど、最初に記した通り、思春期の中学生は周りにどうみられているのか？が気になってしょうがなくて抜けられない。もし、抜けたら今度は自分がターゲットになるかもしれない…。きっと、集団の中の人間関係の維持に懸命にならざるおえない状況に追い込まれていくのだと思う…。

イジメは、ずーっと前から、いつの時代でも起こってきてることだけれど、昔はイジメがあったとき、それを取り囲む集団に「役者」が豊富だったと思う。イジメを見つければ、真正面から正論をぶつけ「そんなこと、やめなさいよ」とたたみこむ女の子がいたり…、イジメを「笑い」にすり変えてくれるエンターティナーがいたり…、殴り合いがはじまれば必ず体を張って止める奴がいたり…、職員室から先生の腕を引っ張って連れていく集団がいたり…、いつのまにかイジメられた子を慰めている大人びた生徒がいたり…。それが、今は「役者」がいなくなり、傍観者たちも「イジメる側」と「イジメられる側」のどちらかを演じなければ「○年○組」や「○○部」という集団からはずされてしまうという気持ちから抜け出せない…それなら「イジメられる側」になる前に「イジメる側」に居場所をつくってしまった方がいい……という雰囲気になってきているかもしれない。昔の役者たちは、みんな傍観者の中にいた…。そう考えたら、**たくさんの傍観者たちのとる行動が、イジメを助長させていくのか？…それとも自制させていくのか？…のカギを握っている**ような気がしてならない…全校の悩み調査をきっかけに**各クラスとももう一度「絆シャフト」を再点検して**2学期終盤を迎えたい！！